

## 「市民的な場の心地よさ」

谷口吉光（秋田県立大学）

去る6月17日、上町で初めて開かれた「ときめきマルシェ」に行ってきました。真っ先に感じたのは「雰囲気がいい」ということ。能代市郵便局から平山はかり店までの道路が歩行者天国になっていて、路上に置いた椅子にみんな座っておしゃべりをしたり、子どもたちのヤートセの実演に拍手を送ったりしています。これまでの朝市だと買い物を済ませたお客さんは帰るしかなかったのですが、今日はゆっくり時間を過ごすことができます。

「雰囲気がいいなあ」と、多くの人を感じたでしょう。でも「どうしたらこんな雰囲気を作り出せるのか」という、いわば「場を作った側の工夫や苦勞」についてはわからない人が多いと思います。それも無理はありません。「いい雰囲気の間を作れるかどうか」ということは地域づくりの基本でありながら、「こうすればいい」という明確な方法はまだ確立していないからです。

ただ、私自身が長年市民運動に関わってきた経験から次のことは言えると思います。ポイントは、その場が「市民的」に運営されているということです。「市民」とはもともと「その町に住んでいる人」という意味ですが、ここでは「その町を住みよい場所にしようと考えて行動する人」という意味で使います。

市民的に運営される場は、みんながそこを「楽しくて気持ちのいい場にしよう」と行動します。たとえば、誰にでも明るくあいさつをします。あいさつをされれば、誰でも同じようにあいさつを返すでしょう。

困った人がいたら進んでお世話をします。お世話をされた人は「ありがとう」とお礼の言葉をいうでしょう。そうすれば、お世話した人もうれしくなります。

こうして、市民的に運営される場には、参加者の「親切」や「優しさ」が持ち寄られます。初めて参加した人も優しさのお裾分けをもらうことができ、ホッとした気持ちになり、次には自分も優しく親切に振る舞うようになるでしょう。こうして、他人に優しく親切にすることが、市民的な場の暗黙のルールになります。

「ときめきマルシェ」で感じたいい雰囲気のコツはここにあると思います。それでは、どうしてこういう場がなかなかできないのでしょうか。それは「しがらみ」「陰口」「足引っ張り」などの悪い習慣が今でも人々の心の中に巣くっているからです。地域を住みにくくしているこうした悪習を少しずつでも克服していく必要があります。

読者の皆さんも、「ときめきマルシェ」に行って、市民的な場の心地よさを体験してみたいかがでしようか。

（北羽新報「トランジションの風」 2018年7月6日掲載分に加筆・修正した）